

## <追悼文>新崎盛暉さんの周辺について

我部, 政男

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

443

(終了ページ / End Page)

454

(発行年 / Year)

2020-03-31

## 新崎盛暉さんの周辺について

我 部 政 男

新崎盛暉さん、突然、こんなにも早く急なお別れを申し上げなければならなくなった。ほぼ半世紀の五十年に及ぶご厚誼に対し感謝とお礼を申し上げます。時代の表現者として、現実の沖縄の課題を切り取って心に残る言葉で遺してくれた新崎さん。あなたの遺された著作のすべてを合わせると、およそ、一〇〇冊に達するはずであるが、それらはすべて、戦後沖縄民衆史の濃密な言葉をちりばめた後世へと語りつがれる遺産なのであると私は思う。あなたの希望通り、将来の読者に受け入れられることを私は信じます。

新崎さんの比較的近い周辺にいた私の立場で、何が見えて、何がのぞけるのか、改めてその周辺を眺めてみることにする。

新崎盛暉さんは、私にとって親しみを感じる良き先輩であり、同時に沖縄現代史の研究分野での数歩も先を行く師匠的な存在でもあった。学ぶべき多くを持ちながら、実際にはそう多くは学び取れなかった。しかし、研究の基本の方法には、試行錯誤の末どうにか達することができたのではなからう

かと、今は考えている。そのように慕い思う人を失うことは、暗澹とした寂寞の情に陥るのが常である。時間の経過の忘却の中では、少し離れてみると、変わらず平服のまま近くにいるように思えてならない。新崎さんの存在は一人孤立しているのではなく、中野好夫先生を取り巻く集団の一人として存在していたように私は思う。その象徴的な存在の新崎さん個人の消失は、その集団、グループの終焉をも意味しているように考えられる。新崎さんは、中野先生を中心とする集団のいわばリーダー格的な存在でもあった。別の見方をすれば、アメリカ統治下の沖縄の日本・祖国復帰運動の激動の嵐をくぐり抜けてきた経験を有する世代なのである。

沖縄内部の人限定して言えば、ここ数年に大田昌秀さん福地曠昭さん宮里政玄さん（私の琉大での恩師）らが活躍の舞台を明け渡して、別の世界へと旅立ったのと、同様な意味を持っているであろう。中野先生の動きを焦点に見ていくと、奄美紀行を（後述）実行した集団の行動や資料集の編集作業集団というのは、その意味でも代表的なグループの活動ということになる。その中野先生と沖縄のグループの一人として新崎さんは鎮座していた。そして少し前に先を急いだ同じグループの高橋実さんもいるので、ここで併せて触れることにしよう。

現代の課題を歴史の流れに照らして明らかにし、その見方や考え方が後世の批判に耐えうるような記録を残すことは、おおきな決断と緊張が要求されよう。それに向けて精力を集中した人の生き方は、精悍であるだけでなく、ある美学が存在するように感じらる。その美学の根底には、記録の不完

全さを補強する素材として、弛まぬ資料収集への熱意と執念がある。新崎さんは、まさしくそのような仕事に没頭してきた個性豊かな人物である。進行する沖縄現代史の記録に励んだ人の喪失は、沖縄の地域にとっても大きな損失であり、痛手である。繰り返しを免れないが、ここでは私の新崎さんとの交流の思い出の一端を追想し、哀悼の意を表す指標としたい。

新崎盛暉さんは、沖縄大学の教授となり、生活の根拠地を沖縄に移したある年に、中野先生との間で、積年の懸案事項になっていた奄美紀行の実現に走りだした。内容は、中野先生を奄美大島の旅に連れ出す計画である。メンバーは、中野先生、同行者の高橋実さん、新崎盛暉さん、それに私の四人である。その記録は、ジャーナリストの高橋実さんの繊細で正確な筆で、残されている（『沖縄文化研究』12（一九八六）所収の「中野好夫先生、琉球弧の旅」）。高橋さんの筆は楽しい旅の思い出として四人で奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島、与論島を旅行したことを、あたかも水墨画のように鮮やかに描写している。その記述の出色の個所は、中野先生の会話や発言を適度に取り入れて、話の筋を展開しているところであろう。その巧妙でシニカルで自虐的ともとれる言葉が、私には鋭く胸に迫るものがある。いまその高橋さんの紀行を読むと、その描写は、私を何の抵抗もなく、すんなりとその過去に引き戻してくれる。目を閉じると奄美の島の情景が、連鎖反応を起こしイメージを拡大させてくれる。その紀行に参加した中野先生、高橋さん、新崎さんの三人は、帰らぬ旅に立たれた。今は一人残るのみである。

私が思うに、表現者を志す新崎さんは、自立した精神を持ち、自己の信条に従いゆるぎない行動をとる人であった。このように言葉では簡単に言える性格の表現であるが、実際に受ける新崎さんの印象は、また違う面もある。もつと重みがあり、笑顔があり、温かみも備えている。その神髄は『私の沖縄現代史―米軍支配下時代を日本（ヤマト）で生きて―』（岩波現代文庫）に余すところなく記録され、伝えられている。この著書のように歯切れよく率直に語る口調から、読者はその文章の奥に秘められた多くの襞をもった表現の精神の数々を拾い上げることができであろう。新崎さんの手法のように、時代の流れに自己を投げ込んで語る自分史は、歓迎され、多くの読者を得た。

しかし、那覇に居を移しての生活から始まる復帰後、沖縄大学での活動の後半部分の自分史の執筆を成し遂げることなく、先を急がれたことは、本人自身も無念であったらうと想像する。今となっては、困難な仕事になるが、遺稿として残された日記や史料の断片をつなぎ合わせ、さらにその間に成し遂げられた数多くの著作から読み取るしか方法はないかもしれない。この後半部分のないことを私も寂しく残念に思うものの一人である。

話の進め方は、脈絡がなく前後するが、私との関連で進めてみよう。

一九六五年に上京した私は、当時、東京都庁に勤務していた新崎さんと巡り合うことになる。新崎さんは、都の職務を果たしながら、もう一方で、中野好夫先生の主宰する沖縄資料センターの資料の分類や雑務の仕事を引き受け、精神的に取り組んでいた。私も必ずしも明確に意識できているわけ

はなかったが、何となく同じ方向の風をもとめているように感じとっていたかもしれない。新崎さんの性格は明るく、よく人の話を聞く態度を堅持していた。関心の分野が広い。それでいて、ある程度の風通しの空間を持つ関係を心がける。相手への配慮も忘れない。

私の問題意識も沖縄の返還問題、日本復帰運動には予てより深い関心があり、沖縄資料センターの月例研究会には、ごく自然に接近していった。研究会では中野先生の隣の席を占めていたのは、新崎さんであった。報告者の話を聞き、問題の所在を参加者に分かりやすく導く案内人の役は、新崎さんの仕事であった。その会の雰囲気にも馴れるに従い、新崎さんとの隔たりも近くなり、親しみも増して行ったはずである。その関係の大きな転換点となるのは、資料集の編纂事業に係るようになってからであった。それは、資料センターにとっての文字通りの大事業であった。この事業計画の大まかな流れは、先の『沖縄文化研究』12の拙稿「二つの資料集の刊行」で述べておいたので繰り返さないことにする。資料集というのは、一つは中野好夫編『戦後資料 沖縄』（日本評論社）、あと一つは新崎盛暉編『ドキュメント沖縄闘争』（亜紀書房）である。この企画の中心で全体の統合を目指して働いたのは新崎さんであり、かれの忍耐力と構想力がなければ、この計画を完成させることは困難であったろうと想像する。他の編集員の協力のあったことはもちろんであるが。

私が、新崎さんを意識し知るようになったのは、中野好夫先生との共著『沖縄問題二十年』が刊行

された一九六五年以後である。顧みるに実に半世紀も前の出来事なのである。中野先生のお名前は、教科書に掲載された『ジュリアス・シーザー』の翻訳者として、何となく著名な英文学者であると記憶していた。

不思議なことに、私が「出・琉球」（はやい話、分かりやすく言えば、留学と呼ぶ沖縄脱出である）のイメージを抱き、大学院への進学のために上京したのも同じ一九六五年である。前年には、東京オリンピックも開催され、その余韻もあり、私の大学院の体育学部の学生には、メダリストもいるとの噂で盛り上がっていた。

大学生協で『沖縄問題二十年』を購入し、著者の新崎さんに会いたいと衝動的に行動したとしても、何ら不思議ではない時代的な状況であった。青版の岩波新書に目を通しただけで、新崎さんの論理や主張をどれだけ理解していたかは、必ずしも明確ではないのだが、アメリカ支配下の沖縄の問題を広く国民に知らせようとする鋭い気迫と啓蒙的な情熱だけは、すんなりと伝わった。日本近代史の明治期に関心を持つ私には、アメリカ支配から抜け出て日本国に復帰する道程を示しているのが、明治の琉球処分時期だと認識されていた。復帰の可能性を具体的に示す歴史事象として捉えられていた。少なくとも、当時の私は、そう考えていた。復帰後の現代とは、全く逆の発想になってしまっている。今はそう考える人は一人もいないはずであるが。私は、戦中・戦後の生活の基盤を沖縄にかかわっているだけで、本書で展開している論理を理解する能力には弱かった。戦後史の日米関係の最大

争点となる沖縄問題に、歴史的な理解を持つほどの洞察力ももちろん欠如していた。それだけに新崎さんへの憧憬の念が膨らんで、教えを請いたいという気持ちだが、ごく自然にたかぶって行ったのであろう。

そのころ中野先生の主催する沖縄資料センターの研究会が神田の学士会館で開かれていた。著名な学者や社会運動家が講師になって、話をされている。沖縄資料センターが設立されるのは一九六〇年である。私の上京以前のその五年間の出来事は、新崎さんの最後の著書となった、前出の『私の沖縄現代史』で詳細に論じられている。その本のサブタイトルには「米軍支配時代を日本で生きて」となっており、日本には「ヤマト」とルビを振っている。新崎さんにとって、両親の出身地沖縄への関心が際限なく集中・拡散する時期でもある。その焦点が米軍支配下の沖縄に絞られたときの、中野好夫先生との運命的な出会いは、ある必然的な邂逅を匂わせるように感じられる。

私も資料センターに顔を出すようになって、新崎さんとも親しく会話を交わす機会も徐々に増えた。その後、出張や現場訪問の多い新崎さんとは、有楽町の交通会館の二階の喫茶店で会うことが多くなった。新崎さんの勤務先の事務所は、そのビルの中にあつた。

確かそのころであつたが、新崎さんの初めての単著『沖縄返還と70年安保』（現代評論社）が出版された。その表紙の帯には「沖縄問題の総決算・沖縄の中央に君臨する嘉手納基地がわれわれに問い



かけるものは何か。坦坦と続く軍用道路の彼方に待ち受けるものは何か。70年を目前にして考える」との言葉がある。その本を買い求めて、次に著者の署名を求めた。照れくさそうに新崎さんは、私の求めに応じ、謹呈と書いてもう一冊くれた。今手元に二冊が保管されている。懐かしく思い出の本である。

中野先生や新崎さんとも実質的な交流の深まるのは、先にもみたように『戦後資料 沖繩』（日本評論社）の編集事業に係るようになってからである。中野先生は編集会議には毎回出席され、発言もされていた。時には、私たちの知らない面白い話題を提供して、私たちを楽しませてくれた。

『ドキュメント沖繩闘争』（亜紀書房）は、新崎盛暉編で、書名にもあるように闘争という意気込みで、沖繩社会の政治運動に重きを置いた編集になっている。編集作業には岸本建男さんと渡名喜明さんが加わり、また在京の若い学生等が協力した。そのあたりの「自分史」の新崎さんの記述は、冴えており記憶も鮮明である。

資料集は正確な資料の収集が重視されなくてはならないのだが、公文書の中には、信用のおけない文献も混在する。もっと複雑な作業は、集めた資料を系統的に配置分類することである。時代の特徴を捉え、時期区分を確定し、周辺の現象との関連を明確にして、資料の位置を決める。大きな流れをとらえる手法と見識が要求される。この煩雑な仕事を引き受けたのが、新崎さんであった。その大変な課題を新崎さんに命じたのは、他ならぬ著者の中野先生であった。信頼に応えたのも新崎さんで

あった。細かい綿密な年表的な一覧表を拝見して、私は驚きを禁じ得なかった。私は史料学の基本とその真髓を学ぶ機会を得たのである。一部の研究者には、研究が絶対であり、史料は一段低く重視しない傾向があるが、それが間違った認識であることも学んだ。学問研究がしっかりした史料と史料批判を基礎に成立することを示唆したのであろうか。

新崎さんは、言葉の表現に力点を注ぎながらもその影響にもまた、関心を示した。限られた状況での表現が完璧でないことを意識し、その検証のための方法にも目を向ける。実践や運動もその一つの手法であろうか。自分史の『私の沖縄現代史』には、表現者の内面の心情で思考の変遷も読者に理解できる形で提示されている。

後のことなるが、新崎さんは、これまで収集したすべての資料を沖縄大学の図書館に寄贈され、大学図書館から貴重な目録が刊行されている。資料の公開は、自己の仕事の責任の取り方として、前提条件でもある。仕事の内容を検証し、それを可能にする方法も準備された。学術研究の方法の基本を貫いているといえよう。

新崎さんを仮に民衆史の表現者とするならば、表現者とは、表現の内容とその根底を支える資料とを同時代の人々と未来の人に託する行動者であると考えたい。私は、新崎さんをこのような人として理解している。

『戦後資料 沖繩』の編集者の一人である高橋実さんは、先に紹介した奄美紀行の執筆者である。共同通信社の沖繩支局長を勤められ、本社に戻られたときに中野先生から声がかかり編集者になった。高橋さんもジャーナリストとして、原資料には特別の関心を持つていた。沖繩関係の資料調査では、共同通信社の資料室の奥深くに保管されていた資料群にも関心を示した。その資料室を何度か訪ねた。共同通信から配信された原稿のもと資料が保管されている。この経験は、資料調査の楽しみを私に学ばせた。国会図書館での沖繩論議の議事録の調査、国立公文書館、外務省外交史料館での関係資料の調査及び収集も順調に運んだ。大事業は、ついに完成の日を迎える。

東京に出る目的には、大学院進学的目標もあったが、研究者になれないのであれば、ほかの仕事も考えねばならなかった。それとは関係なく編集者になりたいという夢は、長い間温めていた。その心の動きが表面化した。そのころ、私は出版活動にも関心を持ち、大里（親泊）康永著『義人謝花昇伝』の復刻を考えた。ある出版社が復刻に関心を示し、書名も改題し『沖繩の自由民権運動―先駆者謝花昇の思想と行動』として出版された。戦後の沖繩の国政参加の風潮の中でこの本は多くの人の関心を集めた。私は、その本への反響と書評を集め明治の謝花昇の運動と対比してその意義を文章にした。甘えの気持のあったことも事実だが、それを中野先生に目を通していただいた。中野先生はその原稿を高橋実さんに渡したようである。読めるように手を加え、そのまま雑誌『展望』の編集をしていた小宮正弘さんにわたり、一九七〇年十二月号に「謝花民権と国政再参加」となって掲載された。中野

先生の「蘆花徳富健次郎」も『展望』に連載中であった。その高橋さんは、数年後には共同通信社のモスクワ支局長になり、ロシアの政治文化に関心を持ち、翻訳書も出している。会社の定年後は国際記者の経験を活かし、法政大学で、国際政治の講義を担当していた。当時、ロシアから法政大学の客員教授として来日中のコンスタンチン・サルキンソフ教授に私を引き合わせてくれたのも高橋実さんであった。不思議な縁で、ロシアのことはサルキンソフさんから教わることになる。数回、ロシアを訪問した。サルキンソフさんとは日露戦争の関係資料を求めて、ロシア、アメリカ、中国の各地を訪問したこともある。人の輪の広がりをも不思議に思わないではいられない出来事である。

東京教育大学の大学院で家永三郎教授のもとで日本近代史の研究を目指していた私は、研究室の枠を超えて、沖縄について深い関心と興味を持つ著名な方々との接触を通じて、様々な分野の存在に眼を開かされた。とりわけ、学問研究の原点が史料の調査・収集にあることを教えられた。私にはまたとない貴重な経験となるのである。

このように中野先生を中心とする沖縄資料センターでの動きに注目すると、私の行動は、その範囲内で動いていたことが判明する。その影響力のすごさを思い知らされる。実際その影響下で育ったことを自覚するのは、時間の過ぎ去った後のことである。大学院での日本史の学習の成果も徐々に蓄積され、資料収集の調査方法も身に付き、いつしか両者は合体し相乗効果を持ち始めた。その後には、

三一書房から刊行された『明治十五年十六年 地方巡察使復命書』（上・下）等は、思いもよらない結果なのである。

中野先生は、核兵器廃絶運動、沖縄返還運動、美濃部亮吉を知事にする運動はじめ、多様な運動に関わっていた。その合間を縫って資料集の編纂にも関わられた。その中に新崎さんも居合わせた。その人脈の織り成す状況の中で、私も充実した時間を共有させてもらった。この充実し幸福な時代を創造してくれたことを沖縄資料センターに深く感謝したい。沖縄資料センターを主宰された中野好夫先生、新崎盛暉さんに、一言「ありがとうございます」と申し上げたい。